

対人援助学 & 心理学の縦横無尽

(26)

福島、ふくしま、Fukushima (5)

サトウタツヤ

(立命館大学総合心理学部)

★ プロローグ

人生の出来事はその瞬間に作られた意味だけではなく、後におきた出来事によって意味づけられることがある。私にとって、福島大学行政社会学部に教員として在籍していたという出来事は単なる前歴の1つであり、キャリア形成プロセスの1コマでしかなかった。ある時まで、そう 2011 年 3 月 11 日までは。

この日に起きた東日本大震災と翌日に起きた東京電力福島第一原子力発電所事故によって福島の持つ意味は変わった。後で起きた出来事（大震災）が、その前に起きていた出来事（福島大学教員）の意味づけを変えたのである（文脈効果とも呼べる）。

そして、私自身も、その後 1 年間の逡巡を経て、福島を何度も訪問するようになった。ゼミ生達の卒論のテーマに福島に関するものも増えた。院生のうち二人が福島県の大学に研究職として就職した。寿もあった。関西の大学としては珍しいことであろう。

福島との新しい関わりについては、この対人援助学マガジンにおいても何度か紹介をしており、第 4 回目は 2015 年 11 月の浪江町訪問について扱った。5 回目となる今回は、2016 年以降の出来事についてふれてみたい。

★ 学校法人立命館と福島県 連携協力協定締結 5 周年記念行事 公開講座「ふくしまの今と未来」開催

2018 年 12 月 14 日。

福島県と学校法人立命館は、2013 年に連携協力協定を締結した。それ以来、立命館は関西・京都の地から国内外に向けた福島県の現状や魅力を発信する取り組みを行ってきたのであるが、締結 5 周年を記念して、内堀雅雄・福島県知事が OIC を初めて訪れることになり講演を行った。

内堀知事の講演は総合心理学部の講義「社会の中の心理学」にて行い、一般来場者を

交えた約 300 人が参加した。防災情報システムや思い出工学を専門とする仲谷善雄・情報理工学部教授(2019年1月1日より学校法人立命館総長)によるゲストトークも行われた。

さらにはゼミナールやスタディツアーを通じて活動を行い福島について学んでいる学生たち、立命館大学「チャレンジふくしま塾」、「サトゼミ」、関西大学の「橋口勝利ゼミ」より活動事例発表が行われた。



図1 講演する内堀雅雄・福島県知事 図2 講演する内堀雅雄・福島県知事



図3 講演する仲谷善雄・情報理工学部教授(現・学校法人立命館総長)

サトゼミの発表はM1(当時;サトゼミ15期生の饗庭桃子さんが行った)。



図4 サトゼミの発表用PPTより

以下で講演に参加した学生達の感想を匿名で紹介してみたい。

△1 今回の講義において特に印象に残ったのは内堀知事のお話です。

内堀知事のお話は福島県の歴史と伝統、良質な観光資源や食材についてや希望・危機意識・挑戦という3つのキーワードについてのお話でした。

福島県は震災当時急激な人口減少や原発事故による県産農産物の輸出減少といった危機がありました。現在では内堀知事をはじめとした福島の人々やボランティア人たちの努力によって県産農産物は震災前の輸出量を超えて過去最高を記録するまでになっているとのことでした。

内堀知事のお話から未来をしっかりと見通すことと広い視野をもって新しいことにチャレンジすることの重要性が分かりました

△2 私が心理学を学びたいと思ったきっかけの1つとして、東日本大地震があります。当時小学6年生だった私は、テレビに映った福島や岩手の様子に衝撃を受け、また、大切な人やものを失った人々が苦しんでいると知りました。そんな人たちの力になりたいくて、私は今心理学を学んでいます。心理職に着くかどうかは分かりませんが、苦しんでいる人を助けられる人になりたいです。

△3 今回の講義で一番印象に残ったのは、知事さんの話のうまさです。さすが政治家だなと思うような説得力のある話し方で話の内容がすいすいと頭に入ってきましたし、これから福島県産の商品を選ぶようにしようという気になりました。

お話の中でも特に、「福島県民にとって3.11だけでなく3.12も14も15もすべて忘れられない日付です」という言葉にはっとさせられました。2011年、中学生だった私はテレビで流れる津波の映像を見て恐怖を感じ、それ以降目を背けるようになっていました。なので、東日本大震災といえば津波の印象が強く、原発事故の印象があまり残っていませんでした。

今回のお話を聞いてあらためて東日本大震災の凄惨さを知りました。また、福島県民にとって目を背けることのできない現実を見ないふりしてしまった自分が恥ずかしく思いました。

震災から7年がたったいまでも福島県は風評に悩まされています。福島県産の商品を購入することで少しでも貢献したいと感じました。

△4 今回の講義で一番印象に残ったのは、知事さんの話のうまさです。さすが政治家だなと思うような説得力のある話し方で話の内容がすいすいと頭に入ってきましたし、これから福島県産の商品を選ぶようにしようという気になりました。

お話の中でも特に、「福島県民にとって 3.11 だけでなく 3.12 も 14 も 15 もすべて忘れられない日付です」という言葉にはっとさせられました。2011 年、中学生だった私はテレビで流れる津波の映像を見て恐怖を感じ、それ以降目を背けるようになっていました。なので、東日本大震災といえば津波の印象が強く、原発事故の印象があまり残っていませんでした。

今回のお話を聞いてあらためて東日本大震災の凄惨さを知りました。また、福島県民にとって目を背けることのできない現実を見ないふりしてしまった自分が恥ずかしく思いました。

震災から 7 年がたったいまでも福島県は風評に悩まされています。福島県産の商品を購入することで少しでも貢献したいと感じました。

さらに、授業で作製された川柳も匿名で紹介したい。

△福島へ 希望を繋ぐ 立命館△感じるよ 知事の思いが いい声で△地震のち 津波災害 メディア被害△只見線 観光客に 人気です△フクシマの 今を知ること 大切だ△挑戦が 未来を拓く 福島県△福島の 美味しい食べ物 食べたいな△春休み 行ってみたいな 福島に

内堀県知事による講演が学生達に多大な影響を与えたことが分かる。コーディネートする側にとっても、本物に触れるということの意味は大きいと感じさせるものであった。なお、この企画に際しては学校法人立命館・災害復興支援室ほか多くの方のご支援を受けた。記して感謝したい。

★「大学生の力を活用した集落復興支援事業」

話は前後するが、2018 年度、ゼミ生達（サトゼミ 16 期生）が新たに福島県の委託事業「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に応募したところ採択された。この事業は福島県内の市町村と大学の学生が協力して集落復興を行うというもので、サトゼミとしては喜多方市を希望していたのであるが、結果的に古殿町・下松川地区の皆さんとの交流を行うことになった。後で分かったことだが、この古殿町の風間雄一郎副町長は、立命館大学法学部出身の校友であった。立命館大学の校友は熱い人物が多いが、この風間副町長も立命愛に燃える熱い方であった。以下では、平成 30 年度末に提出した報告書をなぞりながら 1 年間の活動を振り返り、最後に、本年・令和元年 5 月に行った活動についても紹介してみたい。

なお、県の事業には登録団体名が必要であり、サトゼミ 16 期生の数名が中心となって、サトゼミ・エンタープライズという団体名で応募した。2018 年度はサトゼミ 16 期生と大学院生（サトゼミ 9 期生、15 期生）が参加し、2019 年度は新 3 回生にあたるサトゼミ 17 期生も参加した。

以下で簡単に活動を振り返ってみる。

2018 年

8 月 14・15 日 第 1 回目の訪問

参加者 大島経寛、國岡孝典、田井中宥乃、千藤竜暉／サトウタツヤ



図 5 古殿町・風間副町長とサトゼミ生（2019 年 8 月）

13 日は観光資源である展望台「富士見台」に上った。富士山を目視できる最北限だとのことである。この日の宿泊は古殿町の施設である大網庵を利用した。古民家風の大変立派な平屋建てであった。



図 6 三株山を見渡すことができる展望台 図 7 大網庵にて（貸し布団屋さんと共に）

10 月 13-14 日 流鏝馬祭り

参加者 田井中宥乃

古殿八幡神社例大祭（宵祭）にて流鏝馬大会秋の陣を鑑賞した。



図8 流鏝馬大会秋の陣

町民の方からお話を伺う中で、「(町の良さに気づいていない) 町民にこそ流鏝馬や町の良さを伝えたい、知ってほしい」という願いがあることがわかった。

12月1-2日

参加者 饗庭桃子、田井中宥乃、大島経寛/サトウタツヤ

下松川地区の地域振興や三株高原でのイベントについて町民の皆さんとディスカッションを行った。地域の皆さんの目標は、(1) 三株高原まつりの参加者を増やす、(2) 特産物や自然などの豊富な資源を活用し観光客を増やす、ということにあった。(2) は外部の人に古殿を知ってもらうことであるが、(1) については町の住民が自らの町の良さを知って欲しいという願いが背後にあることが再確認できる。



図9 住民の皆さんとディスカッション 図10 三株高原の視察

2019年

2月9日 福島市で活動報告会「地域づくりオープンカフェ」に参加。県知事の表敬訪問、成果報告を行った。

参加者 饗庭桃子、田井中宥乃、大島経寛/サトウタツヤ

この日までに行った活動を報告して好評であった。

3月29日 古殿町

参加者 中田友貴、饗庭桃子／サトウタツヤ

住民のみなさんと再びディスカッションを行った。2019年5月26日（日）に行われる三株高原祭りの活性化について、①まつり自体のリニューアル、②町内小中学校生との交流、③PR 戦略の練り直し、であった。結果的に①と③の一部が実現したものの②は実現しなかった。

また、アンケートを行うことも提案した（実際に実施した）。

5月26日 古殿町

年度が切り替わり、また、年号も平成から令和に変わった。4月からサトゼミ16期生に加え17期生が活動に参加した。三株高原祭りの活性化について、いくつかアイデアがでていたが、当日、立命館大学としてブースを出すことにエネルギーを集中することにした。ブースの内容は、（三株高原祭りの主たる内容である）焼き肉バーベキューを楽しむには年齢が低いお子様向けの企画をいくつか提供することにした（無料）。また、参加者アンケート（聞き取り）を行った。

ここで特記すべきことは、立命館大学総合心理学部のオリター団の協力態勢である。立命館大学大阪いばらきキャンパスでは、毎年5月、いばらき立命館 DAY（以下いばりつ DAY）という地域連携の行事を行っている。総合心理学部は基礎演習（1回生のクラスのようなもの）の全クラスがこの行事に参加しており、クラス毎に地域の子どもたちを楽しませる企画を行ってきた。オリター団とは上級生のピア・サポート組織である。上級生の支援・指導のもと総合心理学部の1回生たちは、地域の子どもたちのために入念な準備を行っていた。一方で、その準備もわずか1日だけのためのものであり、昨年までは当日が終わると使用した物品は全て廃棄されていた。それはモッタイナイ！

そこで、いばりつ DAY で行った企画の内容やその宣伝のための看板などについて、譲り受けたいと申し出たところ、快く協力してもらえることになった。いばりつ DAY 当日の様子も見させてもらい、子ども達が喜んでおりかつ準備がそれほど大変でないものを選ばせてもらった。具体的には、ぬりえ、ゴミ捨てゲーム、射的、ぶんぶん独楽作り、という4つの企画（とその準備物）を譲り受けて、古殿町に送り、三株高原祭りに参加することになったのである。



図 11 ゴミ捨てゲーム

図 12 立命館ブースの遠景



図 13 射的ゲーム

大人目線で考えると、わざわざ高原に来て塗り絵なんてするか？とか、ゴミ捨てるだけのゲームが楽しいか？ということになるのであるが、いばりつ DAY の実績があっただけのことがある企画の数々。立命館大学のブースは焼き肉適齢期前の子どもたちで大いに賑わいを見せた。また、その様子は地元新聞の『福島民友』『福島民報』の紙面を飾ることになった。



図 14 活動が終わって古殿町職員の皆さんと一緒に

△参考・2019年5月の古殿町訪問スケジュール

5月25日

前泊・大網庵；夕食は「九竜」にて

5月26日

08:30 会場入り・設営

09:30 流鏝馬（やぶさめ）大会春の陣見学

11:30 高原祭り開始

12:30 一部ハイキングコース調査

13:15 一部カラオケ飛び入り

15:00 高原祭り閉会宣言

★エピローグ：文化心理学の可能性

「ものづくり・ことづくり・しなづくり」から「ものづくり・ひとづくり・まちづくり」へ

私たちは文化心理学を基盤に TEA（複線径路等至性アプローチ）を活用しながら様々な研究を行ってきた。最近では、ものづくりに TEA（複線径路等至性アプローチ）を役立てようという試みを行っている。ものづくり企業の「もの」志向から「こと」志向へのシフトや、Supply Push から Demand Pull への移行という社会ニーズを捉えようとするものである。これまで、ものづくり企業においては、「もの」づくりの現場が「もの」への関心に傾き過ぎていたことへの反省から「こと」づくりの重視ということが言われてきた。ところで、流通するのは「もの」でもなければ「こと」でもなく「しな」である。「もの」と「こと」の

二項対立ではなく、「しな」を入れることで三鼎構造ができあがる。なお、ここで「しな」とは広義の「しな」でありサービスも含むものであり、「もの」を「こと」に翻訳・架橋 (translate) する役割を担うものである。こうした関係は次の図のように表すことができる。

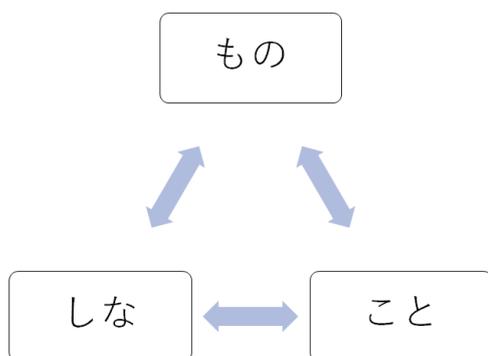


図 15 もの・こと・しなの三鼎構造

私たちは TEA (複線径路等至性アプローチ) によって、ものを買う人々の背後の願いを明らかにすることで、新しいコンセプトメイクを行おうとしているのだが、こうした活動をまちづくりにも転用できるのではないかと考えている。そもそも、TEA (複線径路等至性アプローチ) は、人生のプロセスの研究のために開発されたものである。文化 (記号の配置) がどのように発達とその支援 (教育) と関連しているのか、を研究するためのアプローチであったのである。そして、今、ものづくりに加えまちづくりというテーマも加わった。これは下図のように表すことができるだろう。

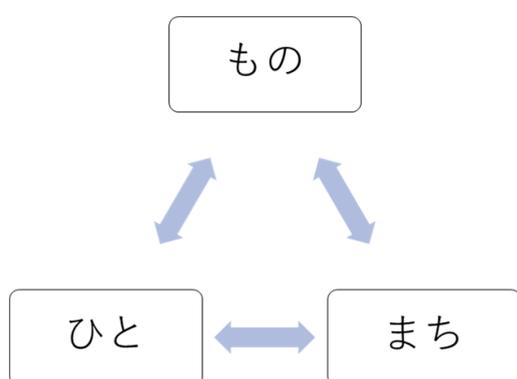


図 16 もの・ひと・まちの三鼎構造

実際、TEA (複線径路等至性アプローチ) の構想に基づいた調査を行っているのであるが、学生の卒論題材でもあり、今ここでアイデアを明らかにすることが難しい。しかし、これまでとは全く異なる発想で、心理学 (文化心理学) がまちづくりと出会えるのではない

かという予感がある。

参考サイト

学校法人立命館

<http://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=1288>

福島県・平成30年度地域づくりオープンカフェ（大学生事業活動報告会）について

<https://www.pref.fukushima.jp/sec/11025b/tiikishinkou-23.html>

謝辞

今回の活動に関して、福島県古殿町の職員の皆さん、学校法人立命館の災害復興支援室の皆さん、総合心理学部オリター団の皆さんのお世話になった。記して感謝したい。